

## 世界地誌教育のあり方を考える

——フィジーを事例として——

辰 己 眞知子\*

### I. はじめに

「地理の危機」が叫ばれてから久しい。その間、地理学に携わる者たちの努力にもかかわらず、事態はさらに悪化している。それは高校での地理履修率の低下や、国名・県名が答えられない学生の増加といった現状にも表れている。この状況を改善するためには、地理教育の見直しが急務であると思われる。

これまでの大学関係者や地理学関連学会などでは、地理教育に関して積極的に働きかけることが少なく、地理教育を重視していたとは言い難い。一方、教育現場では「地理がうまく教えられない」、「適切な教材はないのか」といった切実な要求も多く聞かれる。このような時期に、世界地誌の教材化については一部の研究会活動などで積極的な動きがみられ、地誌教育の実践に役立っていることも見逃せない。

そこで本稿では、世界地誌教育のあり方について上記の活動などを紹介する。そして、理想的な世界地誌を描くためにフィジーを事例として取り上げ、ひとつの教材を提供しようと試みた。

### II. これまでの世界地誌教育の問題点

「地理を教えるのは難しい」という声を教育現場で耳にする。高校の地歴科教員は大学時代の専攻科目や得意科目だけを教えることは皆無に近く、歴史に比べて地理を担当するときは苦勞している教員が多い。筆者の勤務校でも、地理はI類普通科の選択者のみが週2時間履修するにすぎない。そして、毎年地理学専攻出身以外の教員が担当しているのが実情である。さらに、授業内容も系統地理よりも世界地誌が中心になっている。また、取り上げる地域としては時間数にも限りがあることから、中国、インド、ロシア、EU諸国、アメリカ合衆国、オーストラリアといった先進国や大国で、女子生徒が興味関心をもつ地域になっている。それらの地域をステレオタイプのイメージで教えていた。つまり、「テストのための授業」と化しているのである。

その結果、地域に生活する住民の持っている文化とその根底にある価値観、あるいは地域特有の社会構造といった「その先にあるもの」を追求するといった探求的活動が軽視され、魅力に欠ける授業が展開されるのである。

### III. 世界地誌は何のために描くのか

「地誌」が「地域についての記述」であり、求められている世界地誌教育とは、地域やその景観、人びとの生活世界を生き生きと描くことである。このことから地理教育にとって

\* 京都精華女子中学高等学校非常勤講師  
(龍谷大学非常勤講師)

は最も重要な位置にあるといえよう。

世界地誌を描く目的、すなわち、望ましい地誌教育のあり方について、泉 (2005)<sup>1)</sup> は次の5点をあげている。

- ①地域の現状を特に変化の視点でとらえる力を身に付けること。
- ②異文化理解 (地域に生活している人たちへの共感) の態度を養うこと。
- ③地域性を踏まえた現代的諸課題への解決策を模索すること。
- ④地域性を踏まえた将来像 (社会政策) を提言すること。
- ⑤自身の足もとと世界を結びつけるグローバルな視野を身につけること。

こうした見解は、沈滞化する地誌学習の活性化を図る意味において極めて重要である。地理教育の役割の重要性を再認識するとともに、とりわけ社会認識の形成や市民的資質の育成に世界地誌教育が貢献しているといえよう。

#### IV. おもしろい世界地誌を描くには

地誌は地域についての記述であるから、自然地理的記述と人文地理的記述を統合し、さらにその地域を描くという三役をこなす技量が求められてきた。そのためこれまでの地理学者は地誌に正面から向き合うことを避けてきた。その要因として熊谷 (2002)<sup>2)</sup> は次のように分析している。地理学者の書いたものだけが本来の地誌であり、地理学者にしか地誌は描けない。逆に、地理学者であれば地誌 (の一部) くらい描けるという思い込みがあった。第2に、上述のように地誌は自然地理と

人文地理的な記載の双方を含み、それらを「総合」したものであるべきという呪縛。第3に、地誌の記述は客観的・実証的でなければならないという信仰である。これらのしぼりがあるって、地理学者の描く地誌が、読者にとって魅力に欠けるものになった。

教育現場においても地理学者の描く地誌、すなわち地理の教科書 (テキスト) が、生徒 (学生) にとって魅力のない、おもしろくない、という声があり、その結果、単に用語、地名を暗記すればよい科目になってしまっている。教科書の執筆者と現場の教師との間に大きなギャップが生じている。魅力ある地誌 (地域誌とおきかえてもよい) は広義の地域研究の成果に基づいたもので、他とは異なる地域の個性を語るものである。

では理想的な「地 (域) 誌」とはどのようなものか。熊谷は次のように指摘している。

- ①たしかなフィールドワークに根ざしていること。
- ②目に見える景観や物質的な生活様式だけでなく、そこに生きる人びとの生活世界とその世界観に迫っていること。
- ③風景や風土を通じた、人びとと場所とのかわりが、生き生きと描かれていること。
- ④フィールドワークに基づくローカルな生活世界のリアリティを、それをとりまくより大きなスケールの地域との間の関係性の中に位置づけること。
- ⑤地域のとらえ方、および表象や記述のスタイルに著者の個性を感じさせるものであること。

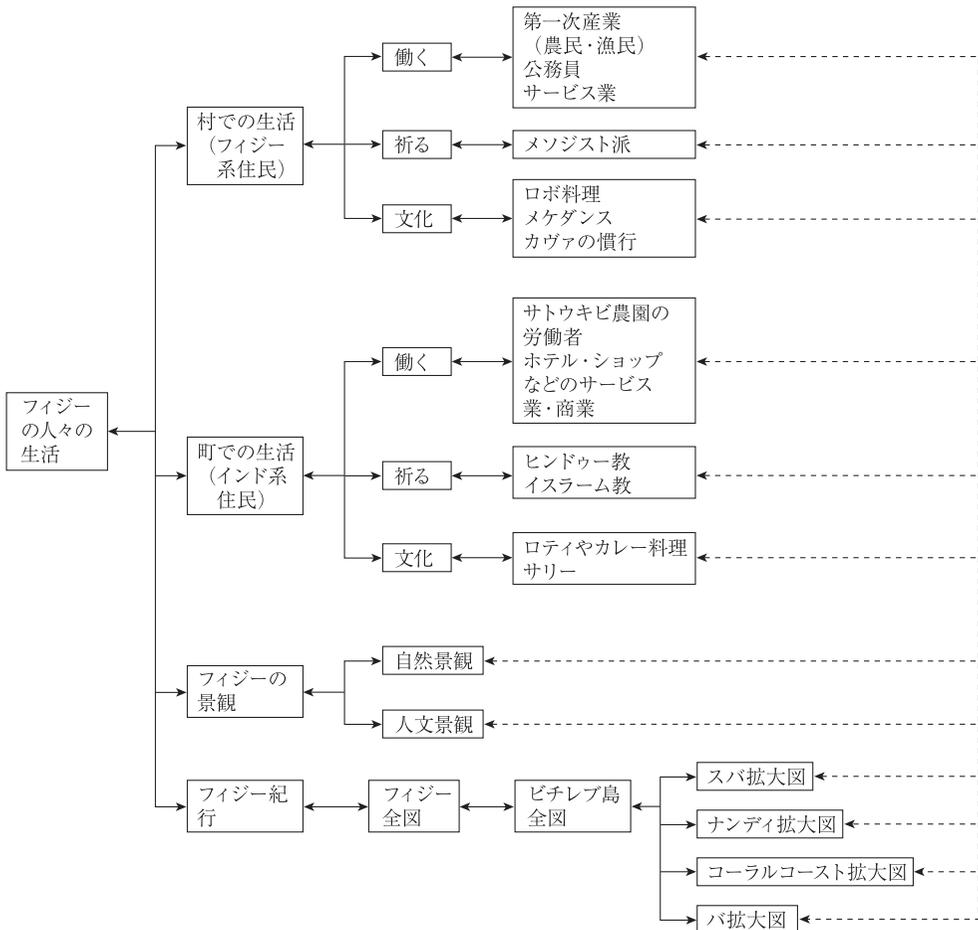
熊谷の5つの視点をふまえて理想的な世界地誌を描くことは容易ではないと思われる。

## V. 世界地誌教育の活動

これまでの世界地誌教育の活動をみてみよう。1992年日本地理学会に「第三世界の地域理解と地理教育」という研究グループがつけられた。このメンバーは3年間にわたる研究活動での成果を「地誌」というかたちで、教育現場にフィードバックする重要性を認識した。この体験をふまえて、研究会の中心メンバーが「第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新」と題した研究グループを発足させ、

報告書をまとめた直後の1999年春の日本地理学会でシンポジウムを開催した。そして、その場で得られた多くの意見をもとに、新たに書き変えて出版されたものが『第三世界を描く地誌』（熊谷圭知・西川大二郎編、古今書院、2000年）である。

この著書は第三世界について長年にわたり、調査・研究している人たちが、2つの目的をもって書いている。1つは地域のステレオタイプ的なイメージを批判することから出発し、インテンシブなフィールドワークに基



第1図 「フィジーの人々の生活」のフローチャート

づいて、「複眼的な視点」からローカルな世界の構造やその変容をとらえ、同時にナショナルなあるいはグローバルな力との関係性の中で、地域の特質を的確に位置づけることである。2つ目は、第三世界の地域像を「地誌」として提示し、一般社会や地理教育の現場に向け発信することである。

とくにⅡ部の「地域研究から地誌・地理教育へ」では、地域研究者の認識とその成果を地誌や地理教育に結実させていくための課題と手法を論じている。興味深い研究は小長谷有紀の「モンゴル地域研究における記述革新」である。ここには、マルチメディア民俗誌を作成するために3年がかりで、モンゴルの電子紙芝居ともいべきCD-ROM版『モンゴル遊牧世界』を制作した。その制作過程、CD-ROMの内容、さらにマルチメディアによる記述の問題点が述べられている。後述のように、筆者は小長谷の作成したフローチャートに着目し、この手法を用いフィジーの人びとの生活について、同様にフローチャートを作成した(第1図)。この手法でフィジーの地域像を描こうと考えたのである。

次に東南アジアの地域像(正しくはその一端)を呈示するテキスト、または地誌書としてまとめられたものが、『現代東南アジア入門』(藤巻正己・瀬川真平編、古今書院、2003年)である。本著は「民族—文化の諸相」、「環境との関わり」、「社会経済の変容」という3つのテーマで描かれている。この中で筆者が教材として利用したのは、中谷友樹の「東南アジアの疾病地理」である。疾病に視点を当てた研究は、その国の衛生状態、経済状態、環境などを理解するうえで役立つ教材であり、熱帯の生態系や疾病について多くの知識

も提供してくれる。

2つの著書はともに大学の研究者によって書かれているため、レベルが高くそのまま教材として利用するのは難しい。地形図や主題図が少ないことも利用を躊躇させる一因となっている。未知の地域を地理が苦手な生徒たちに教えるために、導入のための下準備に時間を要し、それを教材化する教員の力量も必要となる。

一方、中学高校の教師たちが地理の教材化に取り組んでいるのは、全国地理教育研究会である。第50回記念大会開催に合わせて、開発教育の導入を狙いにした『地球に学ぶ新しい地理授業』を2005年に古今書院より刊行した。本書は地理教育関係者と開発教育関係者たちの地球市民性の育成に関する実践報告である。教壇に立つものに本書は多くの刺激と感動を与え、報告者の熱意がうかがえる良書である。

さらに主に関西を中心に活動しているのが地理教材研究会である。最近の活動としては、ステレオタイプのな見方から切り口を変えてその国を捉えようという主旨で、1998年から「地域の何を見るか」シリーズを雑誌『地理』に連載した。続いて「変化する国の教材化」シリーズを連載中である。わずか6頁の紙面であるが、図や資料、データが豊富で簡潔にまとめているため、授業にそのまま使えて教師としては都合が良い。発展途上国や小国の情報を提供しているので、現場の教師にとっては貴重な教材となっている。

以上は地理を専門とする人たちの活動例であるが、地理好きの人々の活動として野外歴史地理学研究会(代表山田誠)があげられる。この会の会員はサラリーマン・実業家・商店

主・医師・僧侶・主婦・学生など様々な層の人たちである。地理や歴史が好きというグループが年1回海外巡検を実施し、毎年1冊の文集を発刊している。海外巡検10年間の文集をさらに充実させまとめた報告書が『世界の風土と人びと』（ナカニシヤ出版、2000年）である。これもまた世界地誌書である。メンバーの熱い思い入れがあって、一般のバックツアーとは異なる、観光客が行ったことがない地域・工場・大学などを訪問しているので、現地の写真や入手した資料は貴重な記録である。筆者は世界地誌の教材として本書を利用してきたが、内容・データがやや古く感じられるようになってきたのが残念である。

以上、世界地誌教育のあり方と活動例を述べてきたが、次にフィジーを事例として、フィールドワークに基づく、生き生きとした

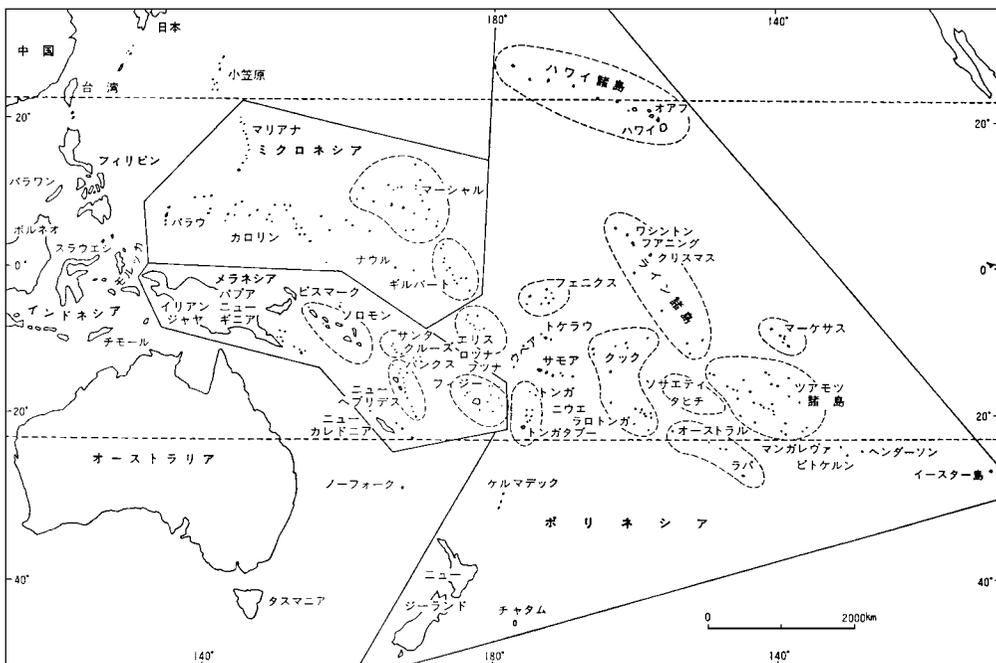
世界像を描いていく。

## VI. フィジーの地誌の描き方

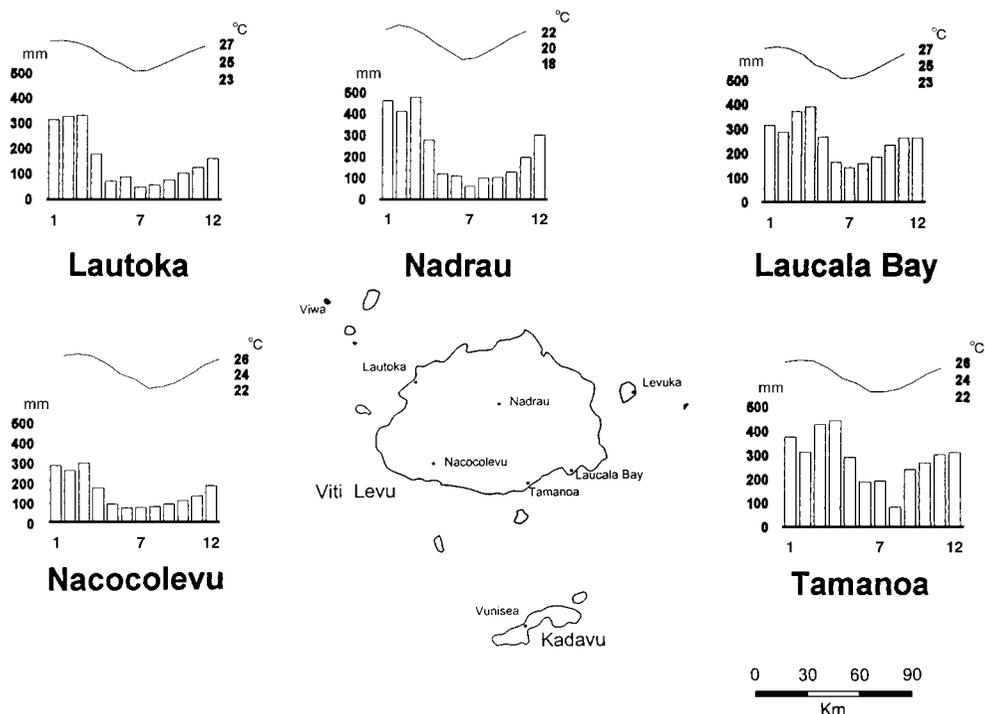
筆者が調査研究を進めているフィジーについて、南太平洋の島国としての自然環境の特徴、歴史と産業、フィジー系住民とインド系住民の生活、環境問題の視点からまとめてみる。

### (1) 南太平洋の島国としてのフィジー

フィジー諸島は南太平洋の日付変更線の西側に位置し、コロ海を取り囲むように大小322の島々が東経175～西経177度、南緯15～22度の間に散在している（第2図）。東側のラウ群島は低平なサンゴ礁からなる島々からなっているが、西側の島々は火山性で山がちである。フィジー諸島の多くは玄武岩などの火山岩や変成岩で構成されているが、沿岸



第2図 オセアニア全図



第3図 ビチレブ島の気候

An Atlas of Fiji (1998) より作成

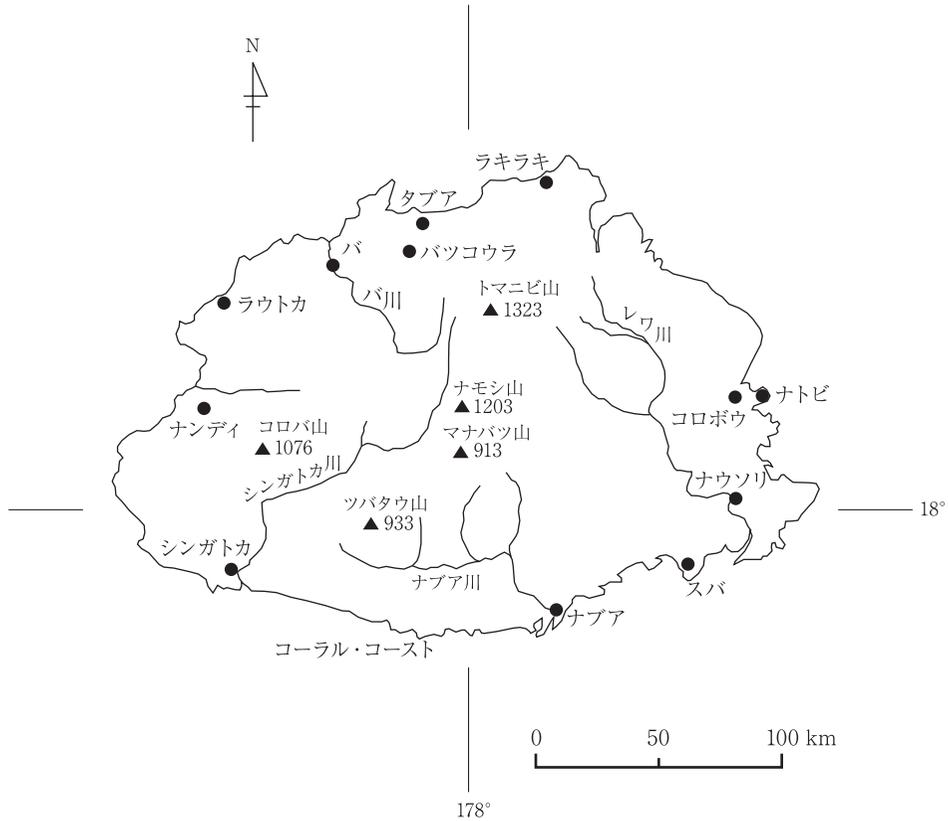
部の低地では砂岩や泥岩などからなる沖積層が堆積している。フィジーの低地はかつて海面下にあった。海水面は4000年前は今より1.5 mは高かったと推測されている<sup>3)</sup>。それ以後、海面は下がり、かつての海岸線が露出している。隆起海岸の崖やサンゴ礁の表面にもしばしばかつての海岸の跡をみることができ

る。気候は穏やかな熱帯海洋性気候で、2つの特徴が見られる。1つは多くの島々で風上側(南東)と風下側(北方と西方)とに明瞭に区別されるといこと。2つ目は11月から3月にかけてサイクロンが到来することである。風下側の年平均降水量は1778~2032 mm、風上側は2921~3175 mmである。年平均気温は25°Cで、風上では少し低く、風下では少し

高くなる(第3図)。湿度は比較的高く75~80%である<sup>4)</sup>。

本稿では、フィジー諸島の最大の島、ビチレブ島を取り上げる。この島の海岸地域は海拔30 m以下であり、狭い帯状を呈している。さらに海拔30~300 mの丘陵が広く連なり、海拔1000 mを超える山地が中央部に存在している。最高峰は1323 mのトマニビ(Tomanivi)山である(第4図)。

サバナ的な気候と山がちな環境にあるため、川の本流や支流沿いの沖積地(現地ではビラという)や低地、河岸段丘、丘陵、山地斜面に広がる耕地にはタロイモ(現地ではダロとよぶ)やヤマイモといった伝統的な根茎作物の他にタバコ、トマト、ヤンゴナなどの商品作物が栽培されている<sup>5)</sup>。また、コー



第4図 ビチレブ島概略図

(図中の数字はm)

ラル・コーストからナンディ、ラウトカ、バに至る低地から山地斜面にかけては、サトウキビとフィジーパイン（フィジー松）が多く栽培され、逆にコーラル・コーストから東方のナブア、スバに至る島の南岸にかけては、雨量が多く湿度も高いため、サトウキビは見られず、熱帯雨林が多く分布している。また、1911年に持ち込まれたマホガニーの林も随所に見られる。サトウキビ、フィジーパイン、マホガニーはフィジーの重要な輸出作物となっている。このようにビチレブ島の海岸部では開発が進んでいることがわかる。このことがフィジーの重大な課題をもたらしている。

## (2) フィジーの歴史と産業

現在独立しているオセアニア諸国は14あり、そのうち、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニアの3国を除いた11の国には共通点が多く見られる。しかし、フィジーの地誌を生き生きと描くには、特異性を述べることが重要である。その特異性は、人文景観に顕著に表れている。フィジーはインド系住民が44%を占めている国である。首都のあるスバ（Suva）や国際空港のあるナンディ（Nadi）にはインド系住民とともに、ヒンドゥー教寺院やモスクを見かける。フィジーでは、フィジー人は村に住み、インド人は町

第1表 フィジーの歴史年表

年 月	出来事
紀元前 1500 年頃	東南アジア方面からフィジー諸島へ人々が住き来する
紀元前 1300 年頃	ラピタ人がビチレブ島北部 (natunuku) や西南部 (Sigatoka, Yanuca) に住み着く
1643 年	オランダ人アベル・タスマン到着
1774 年	イギリス人ジェームズ・クック到着
1789 年	イギリス人ウィリアム・ブライがフィジーのほとんどの島を確認し、ヨーロッパへ伝える
1804 年	白檀が発見され、その交易がヨーロッパとの間で始まる
1830 年	ロンドン伝道教会のタヒチ人宣教師による布教がラウ諸島オネアタ島で始まる
1835 年	ウェスレイ派 (メソヂスト) のイギリス人宣教師がラウ諸島で布教を開始する
1844 年	キリスト教宣教師がビチレブ島へ来る
1854 年	フィジー王ザコンバウがキリスト教へ改宗
1871 年	イギリス人よりザコンバウがフィジーの王として承認される
1874 年	イギリスの保護領となる。この時首都をオバラウ島レブカへ定める
1879 年	サトウキビ農園労働者としてインド人の来島が始まる
1882 年	首都をレブカから現在のスバへ移す
1970 年	イギリスより独立。フィジー自治国としてイギリス連邦 30 番目の加盟国となる
1987 年 4 月	総選挙にて初のインド系ババンドラ内閣が誕生する
5 月	ランブカ中佐を中心とした軍部のクーデターによりフィジー共和国となる
10 月	イギリスがフィジー共和国をイギリス連邦より除名する
12 月	カミセセ・マラ首相のもと軍政より民政へ移行
1990 年 7 月	フィジー系優位の新憲法を公布
1997 年 9 月	イギリス連邦に再加盟
1998 年 7 月	修正憲法発行。国名がフィジー諸島共和国となる
1999 年 5 月	総選挙にてインド人のチョウドリー首相が率いる連合政権が誕生
2000 年 5 月	フィジー人ジョージ・スペイトを中心とした武装グループによるクーデター発生
7 月	イロイロ、セニロリ暫定正副大統領が就任。ライセニア・ガラセを新首相とする暫定文民政権が発足
11 月	ラウトカ高裁が暫定政権を違法とする判決を下す
2001 年 3 月	控訴裁も暫定政権を違法と判決。伝統的首長会議の任命により、イロイロ、セニロリ正副大統領が正式就任。
8～9 月	総選挙が実施されガラセ首相に就任

『データブック オブ ザ ワールド 2005』他より作成

に住むといわれている。なぜインド系住民が多いのか。そのためにはフィジーの歴史を知る必要があり、歴史年表を第1表に示した。

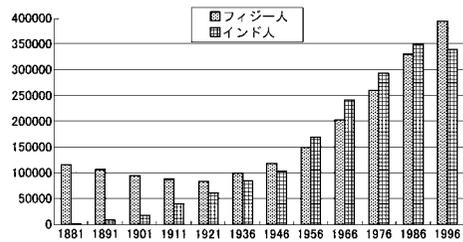
フィジーに人が住み着いたのは紀元前 1300 年頃で、ラピタ人とよばれる先史民族である。

今は地球上に存在しないラピタ人は、ラピタ土器という縄文土器によく似た独特の装飾土器をもつことで知られ、今から 4000 年から 2000 年前頃にニューギニアのビスマルク諸島周辺からメラネシアの島々、さらに西ポリネ

シアのトンガやサモア辺りに住んでいた。彼らは文字をもたなかったが、大型のカヌーを自在に操り遠洋航海に乗り出し、大洋に散らばる島々を次々と発見しては、植民・開拓しただけでなく、大規模な交易活動も積極的に行っていた。

ビチレブ島ではラピタ土器が3か所発見されている<sup>6)</sup>。南西部のシンガトカ (Sigatoka) 遺跡<sup>7)</sup> は、紀元前1300年頃のものとして推定されている。遺跡はシンガトカ川の河口に広がる、高さ35～40 m、長さ約3～4 km なる大砂丘に立地している。この砂丘の堆積層からラピタ土器や人骨化石が出土した。このシンガトカ大砂丘は1989年にフィジー最初の国立公園として認定され、現在はナショナル・トラストの管理下になっている。

フィジーは地理的に近いトンガからの人々や文化の接触があり、多くの影響を受けてきた。さらに17世紀以降、ヨーロッパ人が来航し、19世紀にはヨーロッパ商人によってサンダルウッド (白檀) の商品価値が注目された。この価値に目をつけたイギリスは1874年に植民地とし、サトウキビのプランテーション化を図り、1879年にインドから年季契約労働者 (girmitiyas) 498人 (273人の成人男子、146人の成人女性、47人の少年、32人の少女) を入植させた<sup>8)</sup>。以後1916年に契約移民制度が廃止されるまでの間に62,837人のインド人労働者が移住して、現在に至る砂糖生産国を築きあげた。彼らの4分の3は北東インドのガンジス川流域の村や町からやって来た下層農民、都市の低所得階層、定職のない若者たちであった。残りの4分の1は、主として南インドのタミル語やテルグ語を話す人びとであった<sup>9)</sup>。



第5図 フィジーにおけるフィジー人とインド人の人口推移  
『An Atlas of Fiji』(1998)より作成

1970年に独立するが、独立以後、フィジー人とインド人との民族対立が続いている。契約が切れた後もフィジーに留まったインド系住民が土着のフィジー人を人口で上回った時期もあり (第5図)、政治はフィジー人、経済はインド人という二極対立が深刻化している。

フィジーの人文地理的特徴と課題をまとめると以下ようになる。

- ①フィジーはメラネシアに区分されるがポリネシアに近接していることから、ポリネシア文化の影響を強く受けてきた。17世紀以降ヨーロッパ人が来航し、キリスト教などの西洋の文化が持ち込まれ、さらに19世紀後半に移住して来たインド人の文化も加わって多文化社会を形成している。
- ②オセアニアの優等生といわれるほど、フィジーの経済開発は進んでいる。イギリス植民地政府が推進した砂糖生産が、フィジーの基幹産業として国家の経済を支えてきた。独立後もその砂糖生産に携わっているのがインド人労働者たちである。しかし、近年サトウキビ生産量が伸びず、モノカルチャー経済に陰りが見えてきた。
- ③政府は砂糖産業から観光産業へ政策転換を図った。その結果2つの新たな問題を

生んでいる。ひとつは経済を支えてきたインド人労働者がサービス業やビジネス業に転職したり、海外へ移住し始めたことである。2つ目に、観光開発に伴う環境の悪化が予測されることである。

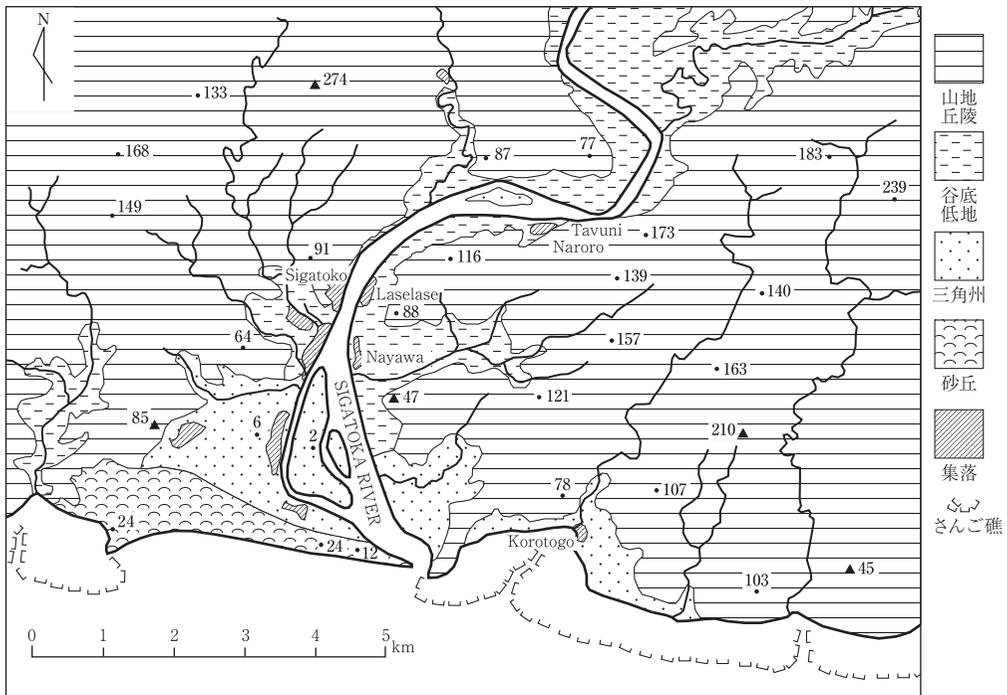
(3) フィジー系住民の生活と文化

伝統的なフィジー社会では、固有の社会構造になっている。まず下位で最小の「父系的親族集団」であるイ・トカトカ (i tokatoka) があり、いくつか集まって「父系的親族集団」のマタンガリ (mataqali)、さらにマタンガリが十数個あるいは数十個集まった「父系的親族集団」がヤブサ (yavusa) で、ヤブサがいくつか集まってバヌア (vanua) が存在している<sup>10)</sup>。またバヌアを地縁の連合体とみなす見方もある。

地縁の集団としてコロ (koro) がある。フィジー人にとって、日常生活はもちろんのこと、経済活動、種々の儀礼、行政、キリスト教関係の活動などにおいても不可欠な社会単位を構成している。しかし、一般にコロは複数のマタンガリまたはイ・トカトカからなっており、コ



写真1 ラセラセ村とシンガトカ川



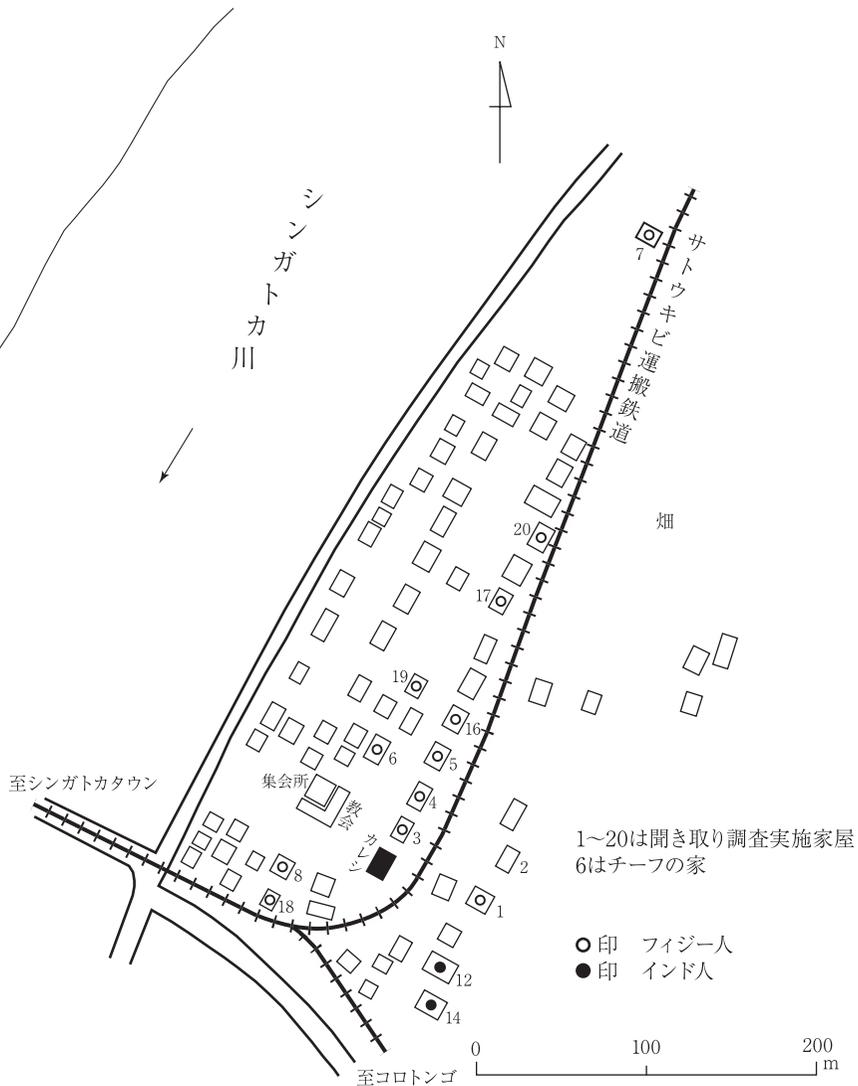
第6図 ラセラセ村周辺地形分類図

標高数字は5万分の1地形図より作成 (単位はm)

ロの種々の活動には、地縁的なコロ単位で動いている側面と、血縁的なイ・トカトカ単位で運営されている面、あるいは両方が機能している場合などが認められ、コロを単なる地縁的集団としてのみ扱うことはできない<sup>11)</sup>。祭礼、婚礼、通過儀礼などの諸儀礼・慣行はマタンガリ・ヤブサといった血縁的な集団だけでなく、

コロやバヌアの範囲にも広がっている。フィジーの農村社会では、種々な分野で相互扶助が行われそれによって生活が成り立っている。

フィジーは国土の82.4%がフィジー人固有の土地である<sup>12)</sup>。1874年イギリスの植民地となり、1879年インド人移民を導入する中で、イギリスは「土着民保護」政策を取ったため、



第7図 ラセラセ村の住宅分布図

2004年11月現地調査にて作成

インド人は土地を所有することができない。

筆者は2004年8月と11月にビチレブ島の南西部に位置するラセラセ (Laselase) 村で食文化の調査を実施した。シンガトカ川の河口から約3.8 kmの左岸に位置するラセラセ村(写真1)は標高5 m前後で、地形的には河岸低地にあたる(第6図)。シンガトカ川の下流には大規模なデルタは発達せず、河口の右岸には大砂丘が見られる。川に沿って約300 mほどの狭く細長い土地が広がり、ほとんどが砂質土壌で硬く、主食となるタロイモをはじめとする農業には不利なところである。

ラセラセ村の人口は350人、世帯数が55(1998年センサス)となっている。住民はほとんどがキリスト教メソジスト派を信仰している。第7図はラセラセ村の住宅分布図を示している。フィジー滞在中に親しくなったカレシさん(写真2)の住宅に隣接して、真新しい教会と集会所がある。カレシさんの父はチーフであった。現在のチーフは叔父が継いでいる。

ラセラセ村の人々は独立するまでは農業と漁業で生計を立て、自給的生活をしていたが、独立後すぐにコーラル・コーストに大型リ

ゾートホテルが建設され、その中心地であるシンガトカタウンが商業都市として繁栄するようになると、ラセラセ村の人々はシンガトカタウンへ徒歩圏内という交通の利便性から、住民の約半数は警察官や役所、政府関係の仕事に就く公務員になったり、村の西7キロにあるシャングリラホテル及び東6キロにあるアウトリガーホテルに勤めるなどの、他のサービス業に従事するようになった。その結果、それまでの伝統的な生活が変化している。

このようにフィジーの村落内では、伝統的な価値観・規範・原理(慣習法・共同体的精神・祖霊信仰・イモ栽培・自給自足)と近代的な価値観・規範・原理(近代法・資本主義的精神・キリスト教・商品作物栽培・現金収入)という相矛盾する二重構造をなしている<sup>13)</sup>。

フィジー系住民の文化として、まずカヴァ<sup>14)</sup>の飲用がある(写真3)。これはオセアニア地域に見られるもので、とくにフィジーでは社会制度と関連し、飲用自体にも儀礼的意味づけがなされている。同様に、神聖な儀式としてベンガ島に住むサワウ族による火渡りの儀式がある(写真4)。ただし、火渡りの儀式はインド人によるヒンドゥー教の荒行として行われるものもある。そして、伝統的な歌と踊



写真2 カレシ宅前にて。右がカレシさん



写真3 カヴァの儀式(コロレブ村にて)



写真4 火渡りの儀式



写真6 ロボ



写真5 メケダンス



写真7 ロティとチャイ

りで構成される芸能であるメケダンスがある(写真5)。男性たちによるものは戦いの前に勇気を奮い起こすためのもので、女性たちによるものは来客をもてなすためのものという意味合いが強い。男はタバクロスという木の皮で作った腰みに、鳥の羽や花で作った飾りで身を包み、女はブラウスにタバクロスを薄く伸ばした繊維に模様を描いた、スルというスカートを着て踊る。これらはリゾートホテルでアトラクションとしてみるのが可能である。

次に伝統的な住居としてはブレ (bure) がある。ブレは長方形の建物で柱や屋根は硬い材木がココナツの繊維でできた紐でしっかりと固定された構造になっている。屋根はココナツ

の葉や草で葺かれている。内部は1ヶ所だけ低い戸口と暖炉がある。固められた地面にはシダ、パンダナス、ココナツの葉で編んだマットが敷かれてある。一方の端には木の皮で作られたカーテンがかけられ、マットと木製の枕がついた寝室がある。多くの村では伝統的なブレが今も残っているが、屋根や壁用の天然素材が乏しくなってきたこと、建築が容易で建築費が安価であることから、新築の住宅はコンクリートブロックやトタン製のものへと変化している<sup>15)</sup>。

フィジー系住民の主食はタロイモ、ヤムイモなどの根菜類であり、「真実の食物」<sup>16)</sup>とみなされている。副食としてブタ、ウシ、ニワトリなどの肉類に沿岸部や河川で捕獲され

る魚介類なども食される。さらにタロイモ（現地ではダロという）の葉やシダなどの緑色野菜とココナツとを組み合わせる料理が特徴である<sup>17)</sup>。フィジーでは伝統的な料理はロボ（lovo）料理とよばれている（写真 6）。ロボとは地炉（earth oven）のことである。しかし、調理に時間を要し、多くの薪が必要であり、また少人数の調理には不向きであることから、最近では、地炉の使用は休日や非日常時（祭礼、葬儀など）に限定されている。

食文化の変容は顕著である。19世紀以降のイギリス人宣教師たちが持ち込んだパン、バター、紅茶、パンケーキ、ビスケットさらにコンビーフなどの缶詰類を、インド人からはロティ（roti）（写真 7）やカレー、米などをフィジーの人々は容易に受容した。現在の食生活は多様性に富んでいる。

#### (4) インド系住民の生活と文化

現在フィジーにいるインド系住民は、大部分は年季契約労働者の子孫である。彼らはカルカッタ（現コルカタ）とマドラス（現チェンナイ）の港から移住してきた。これらの人々のうち約 75%はカルカッタから、残りはマドラスから船でやってきた。カルカッタからの移住者は、85.3%がヒンドゥー教徒、14.6%はムスリムで、0.1%がキリスト教徒であった。ヒンドゥー教徒は種々のカースト出身者からなっていた。バラモンと他の高カーストがカルカッタ経由でフィジーへやってきた人々の16%を占めていた。農民のカーストは 31.3%、職人カーストは 6.7%、低カーストが 31.2%であった。また、カルカッタを出発した人々の年齢は、68.7%は 20～30 歳、17.9%が 10～20 歳、4.9%が 30～40 歳、40 歳以上が 0.2%と若い人が多い<sup>18)</sup>。

契約移民はベンガル州、ビハール州、ウッタラプラデシュ州及び南インドの地方出身者が多かったのに対して、移民廃止後に自分の意思でやってきたのは、パンジャブ州やグジャラト州出身者で、彼らは輸送業や交易に従事し今ではフィジーのビジネス業界のエリートとして名をなしている<sup>19)</sup>。

現在フィジーにいるインド人は 2002 年推計で 327,000 人、今日でも就業者の半数弱がサトウキビ栽培に従事しているが、農用地の獲得が法的に制限されているため、インド系住民の多くはサトウキビ栽培地帯のシンガトカ、製糖工場のあるラウトカ（Lautoka）、バ（Ba）、国際空港のあるナンディ、首都のあるスバなどで働くようになった。彼らは卸・小売業、製造業、輸送関係などの分野で活発な活動をしている。

最初の移民から 120 年以上が経過し、今やインド系住民は 5 世代目にあたる人たちである。彼らがつくっている共同体は、強いアイデンティティをもっている。彼らは教育熱心であり、勤勉でより安全な将来を得ようと願う気持ちが強い。フィジーにいるインド系住民は宗教的儀式、伝統的な食事、衣装や娯楽



写真 8 ナンディのクラフトショップで働くキランさん

などインドの文化を固守している。たいていは手作りのロティ（インドの伝統的なパン）や米とともにチャツネ、ヨーグルト、肉付きのカレーを食べている。また伝統的なお菓子であるミタイ（mithai）にも目がない。宗教的な祭りが近づくと、若い人たちはミタイの作り方を教わる。スバヤバの商店のショーケースでは、山積みされた色とりどりのミタイをよく見かける。女性はサリーを着用している。ムスリムの女性はスカーフを巻いている。ヒンドゥー教寺院やモスクがインド的な町の景観をつくっている。ドーム、ミナレット、竹のポールの頂上にはためく赤い旗などは、インド人であるという強い信念がうかがえる<sup>20)</sup>。バヤラウトカでは、インド映画のポスターやヒンディー語の歌や音楽ビデオなどの販売店が目立ち、それぞれの家庭でこれらの娯楽を楽しんでいる。筆者が滞在したホテルの室内テレビでは、2つのチャンネルでインド系の放送があり、どちらもインド映画や歌番組、ドラマなどが放映されていた。

世界中にいる中国人がチャイナタウンをつくるように、フィジーでもインド系住民が集って町を作り、インド人としての伝統、プライド、アイデンティティを衣食住の生活様式の中に確実に守り続けていることがわかる。

#### (5) フィジーの環境問題

南太平洋諸国は温暖化の影響を強く受けている。フィジーも例外ではない。近年降雨パターンが大きく変化し、雨がほとんど降らなくなって飲料水が不足するようになった島が増えて来た。また、海面上昇に伴い海に近い農地では塩害が拡大している。さらに海水温が上昇し、魚が捕れなくなってきた<sup>21)</sup>。加えて、サイクロンの発生数が増加している。環境

問題への取り組みとしては、JICAやNGOの組織が河口にマングローブの苗木を育成し植林しているが、政府による対策はない。人びとの実行力不足から今後の住民の取り組みや政府の対策を期待するのは難しいと思われる<sup>22)</sup>。

フィジーの場合、今後の人間活動によって生じる環境問題としては、観光開発による森林やマングローブの伐採、沿岸部の埋め立てや道路、水道の新設などの国土改変、金や銅の採掘による山地の荒廃、温暖化による海岸侵食や海岸線の変化、増加する外国人観光客に比例して増えるゴミ、風紀のみだれや犯罪の多発、不足する電力などの生活環境の悪化がある。これらの課題に対して、開発地域をコーラル・コーストとナンディ地域に限定することや欧米や中国資本に頼らない開発が必要である。

## VII. 世界地誌教育のあり方を考える

### —まともにかえて—

低迷する地理を活性化するために、地理教育の重要性を述べ、さらに世界地誌教育のあり方を検討した。これまでの世界地誌教育活動の中で、熊谷らの実践例をもとに、おもしろい世界地誌を描こうと考えた。そこで筆者はフィジーを事例として、たしかなフィールドワークに根ざしてその教材化を試みた。それをまとめたものが第2表である。オセアニアの小国であっても、その地域に生活している人びとの顔の表情までも生き生きと描こうと努めたつもりである。

次にフィジーでの調査結果を世界地誌教育の中でどのように位置付けるかを検討した。特に前述した泉の視点と対応させると、第3

第2表 フィジーの教材化

地域の現状	サトウキビ産業が基幹産業。労働者としてインド人を導入。フィジー系住民とインド系住民の対立。	
変化の視点	サトウキビ産業から観光産業への転換。	
異文化理解	フィジー系の文化	カヴァの儀式、火渡りの儀式、ロボ料理、メケダンス
	インド系の文化	ヒンドゥー寺院、モスク、ロティ、カレー、サリー
	キリスト教の文化	メソジスト派教会、クリスマス、カーニバル
現在の課題	インド系住民の動向	サトウキビ栽培をやめて転職、カナダやニュージーランドへ移住。
	環境問題	観光開発伴う環境の悪化、地球温暖化の影響
課題の解決策	観光開発の地域をナンディ周辺とコーラルコーストに限定し、他地域を保全する。外国資本・援助に頼らず自立する。	
フィジーの将来像	オセアニア地域のリーダー的存在で「南国のパラダイス」をめざす。	
日本との関係	飛行時間6時間という身近な国にもかかわらず、交流は活発でない。	
オセアニアにおける特異性	メラネシアに区分されるもポリネシア文化の影響を受けてきた。その後、「南太平洋のインド」とよばれるようにインド系住民が多い国。	

第3表 フィジーの地誌の描き方

泉の視点	フィジーでの事象
変化の視点でとらえる力を身につける	サトウキビ産業から観光産業への政策転換 インド系住民の動き：サービス業への転職、他国へ移住
異文化理解の態度を養う	フィジー人の文化とインド人の文化の相違からくる「見えない溝」の存在→村と町の生活という二重構造社会
地域性を踏まえた現代的諸課題への解決策の模索	政治はフィジー人、経済はインド人という対立の構図、インド人が政権を握るとクーデターが起こる政情不安 政府は力不足、環境問題に対する取り組みも、先進国、JICA、NGOが頼り⇒フィジー人の政治的・経済的自立が必要
地域性を踏まえた将来像の提言	勤勉なインド人に対して、のんびりしたフィジー人。 やがてインド人が減少していくことが予測できる⇒高等教育を充実し有能なフィジー人の育成が必要
自身の足元と世界を結びつけるグローバルな視野	オセアニアの小国であるが、日本から飛行時間6時間、時差3時間の身近な国。日本とフィジーの国際交流の活発化を目指す。

表のようになる。「南太平洋のインド」とよばれる状況、フィジー系住民とインド系住民との対立の構図、異文化の受容と変容、村落内における近代と伝統の相克、観光産業への政策転換とそれに伴って起こる、インド系住民の他国への移住と環境悪化など、多くの課題

があることが判明した。

最後にこれらの課題に対して、地理学の立場から高等教育の充実を提言したい。フィジーの教育制度は他のオセアニアの国と比較しても高い水準にある<sup>23)</sup>。首都スバには、南太平洋唯一の総合大学である南太平洋大学が

あるが、ここで学んだ優秀な人材が海外へ流出し、フィジーに留まるものは少ない。教育系・医療系・理工系の大学を新設するなど、高等教育の充実を図ることが急務である。優秀な人材を多く輩出し、やがて彼らが政府を担うようになれば、外国資本に頼らない自立した政府による開発が可能となるだろう。

日本から飛行時間6時間余り、比較的身近な国であるフィジーを取り上げ、今後活発な国際交流の必要性を痛感することにもなった。これからもフィジーを訪れ、異文化理解と日本との国際交流に貢献したいと思っている。

〔付記〕本稿の骨子は2005年立命館地理学会において発表しました。また本稿の一部は2004年度に立命館大学文学研究科に提出した修士論文から引用しました。

論文作成に際して御指導いただいた地理学教室の諸先生方に謝意を表すとともに、現地でのアンケート調査に協力していただいたカレン・ナイノカさんに厚く御礼申し上げます。

未筆ながら、10月に他界した辰己眞平に本稿を捧げます。

#### 注

- 1) 泉 貴久「新しい世界地誌教育のあり方を考える(その1)一従来の世界地誌の問題点と新しい世界地誌の構築に向けての展望一」、日本地理学会発表要旨集 68、2005、39頁。
- 2) 熊谷圭知「面白い地誌のために(再録)」、(全国地理教育研究会編『地球に学ぶ新しい地理授業』、古今書院、2005、所収)、25～28頁。
- 3) Nunn, P. D.: Rocks and relief, in Chandra, R. and Mason, K. eds.: *An Atlas of Fiji*, Department of Geography School of Social and Economic Development, The University of the South Pacific, 1998, p. 18.
- 4) Chandra, R.: Fiji: An Introduction : 前掲3) p. 2.

- 5) 橋本征治『メラネシア一近代と伝統の相克一』、大明堂、1992、67頁。
- 6) ベルウッド、P. 著、池野茂訳『ポリネシア』、大明堂、1985、53頁。
- 7) スバのフィジーミュージアムで入手した Birks, L.: *Archaeological Excavations at Sigatoka Dune Site, Fiji*, 1998に詳しい報告がされている。
- 8) Brij V. Lal: *GIRMITIYAS the Origins of the Fiji Indians*, Fiji Institute of Applied Studies, Lautoka, 1983, pp. 36～39.
- 9) 橋本征治「フィジーのインド商人」、国際協力、384、11頁。
- 10) 春日直樹「フィジーの村落における文化の動態」、民族学研究 55-4、1991、359頁。
- 11) 前掲5) 50頁。
- 12) Ward R.G.: Land Tanure : 前掲3) p. 92.
- 13) 前掲5) 157頁。
- 14) カヴァはコショウ科草本性灌木で、ヤンゴナともよばれ、その根を乾燥させて砕き、絞り出した汁を歓迎の儀式として集団で飲用する。
- 15) かつて村にはブレ・カロウ (bure kalou) 「神の家」とよばれる寺院や集会所の役割をする建物があったが、現在はキリスト教の礼拝堂にとって変わっている。lonely planet 社発行のガイドブック (英文) 110 p.
- 16) Asesela Ravuvu: *The Fijian Way of Life*, Institute of Pacific, Suva, 1983, 32 p.
- 17) 秋道はサタワル島の事例をあげ、主食(イモ類)、動物性食物(魚介類、ブタ、ニワトリ、カメ)にココヤシという三つの食物カテゴリーが対立し、単なる利用可能性や食事の構成としてだけでなく、食物の匂いや超自然的存在とのかわりなど、文化的価値をも説明している。秋道智彌「資源利用の比較生態一太平洋での調査から」、大塚柳太郎編『現代の人類学 1 生態人類学』、至文堂、1983、154～155頁。
- 18) Ahmed Ali: *Girmit Indian Indenture Experience in Fiji*, Ministry of National Reconciliation and Multi-Ethnic Affairs, Suva, 2004, 1 p.
- 19) 前掲14) 35頁。
- 20) 前掲14) 83頁。
- 21) 京都新聞、2005年1月1日朝刊記事
- 22) 前掲3) 24頁。
- 23) フィジーでは初等教育が8年、中等教育が5年で修了すると大学へ進学する。